ごはん (3)

さて、このあとが大変で、※絨毯爆撃がいわれていたこともあり、父は、この分でゆくと次は必ずやられる。最後にうまいものを食べて死のうじゃないかといい出した。

母は取っておきの白米を釜いっぱい炊き上げた。私は埋めてあったさつまいもを掘り出し、これも取っておきのうどん粉と胡麻油で、精進揚をこしらえた。格別の※闇ルートのない庶民には、これでも①魂の飛ぶようなご馳走だった。

②昨夜の名残りで、ドロドロに汚れた畳の上にうすべりを敷き、泥人形のようなおやこ五人が車座になって食べた。あたりには、昨夜の余燼がくすぶっていた。

わが家の隣りは外科の医院で、かつぎ込まれた負傷者も多く、息を引き取った遺体もあった筈だ。被災した隣り近所のことを思えば、昼日中から、天ぷらの匂いなどさせて不謹慎のきわみだが、父は、そうしなくてはいられなかったのだと思う。

③母はひどく笑い上戸になっていたし、日頃は怒りっぽい父が妙にやさしかった。

「もっと食べろ。まだ食べられるだろ」

おなかいっぱい食べてから、おやこ五人が※河岸のマグロのようにならんで昼寝をした。

畳の目には泥がしみ込み、藺草が切れてささくれ立っていた。そっと起き出して雑巾で拭こうとする母を、父は低い声で叱った。

「掃除なんかよせ。お前も寝ろ」

④父は泣いているように見えた。

自分の家を土足で汚し、年端もゆかぬ子供たちを飢えたまま死なすのが、家長として父として無念だったに違いない。それも一個人ではどう頑張っても頑張りようもないことが口惜しかったに違いない。学童疎開で甲府にいる上の妹のことも考えたことだろう。一人だけでも助かってよかったと思ったか、死なばもろとも、なぜ、出したのかと悔んだのか。

部屋の隅に、前の日に私がとってきた蛤や浅蜊が、割れて、干からびて転がっていた。

戦争。

家族。

ふたつの言葉を結びつけると、私にはこの日の、みじめで滑稽な最後の昼餐が、さつまいもの天ぷらが浮かんでくるのである。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋 所収「ごはん」による）

※絨毯爆撃…ある地域一帯に対してすきまなく行われる無差別爆撃。
闇ルート…正規の流通から外れたルート。戦時中多くの食料の流通は政府によって統制され、生活必需品は配給制となった。
河岸…ここでは魚市場のこと。

学童疎開

一九四四年頃から、空襲などの戦禍を避けるために、大都市の児童は地方都市や農村などに移住した。筆者の上の妹は、一九四四年の秋に、下の妹は東京大空襲後に、甲府（山梨県）に疎開した。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「魂の飛ぶようなご馳走」とあるが、これはどのような食事か。適当なものを選びなさい。

ア 驚（おどろ）くほどぜいたくな食事。
イ 気力がなくなってしまう食事。
ウ 戦時中らしい質素な食事。

〔　　〕

(2) ――線②「昨夜の……食べた」とあるが、このときの食事のことを、筆者は何と表現しているか。本文中から十二字で探し、最初の三字を書きぬきなさい。

□□□

(3) ――線③「母は……やさしかった」とあるが、このときの母と父の心情として適当なものを選びなさい。

ア 周囲が被災している中で天ぷらの匂いをさせることが不謹慎で、気まずく思っている。
イ なんとか空襲を生き延びることができ、無事にみんなで昼食を囲むことができたのでほっとしている。
ウ 家族での最後の食事となるかもしれず、子供たちにせめておいしいものを食べさせたいと思っている。

〔　　〕

(4) ――線④「父は泣いているように見えた」とあるが、このときの父の心情について、筆者の視点から思いを巡（めぐ）らせている箇所（かしょ）を探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も一字に含（ふく）む。

□□□～□□□